

【第四〇回大会シンポジウム ユーラシアと日本列島 世界の中のアイヌ叙事詩】

コメンテーターの視点から

丹菊 逸治

本シンポジウムの狙いは、近年の研究で浮かび上がってきた問題点、および新たな位置づけの可能性を考えてみようというものであった。

パネル報告では、奥田統己は孤独な主人公が活躍するアイヌの叙事詩の特徴を、坂井弘紀はチュルク世界に広がる歴史叙事詩をとりあげつつ、ユーラシアの叙事詩の特徴について論じた。萩原真子はユーラシアに広がる叙事詩世界という視点から、地域を越えた共通性を指摘した。坂井弘紀は叙事詩に共通する特徴をあげ、またチュルク叙事詩の歴史性について論じた。それから報告を受けての後半の討論では、モンゴル叙事詩研究の立場から藤井真湖、日本古代文学研究の立場から三浦佑之、ニヴフ叙事詩研究の立場から丹菊逸治がコメンテーターとして参加したが、その内容もユーラシア規模での再検討を視野に入れたものとなった。

「日本古代文学とユーラシア叙事詩の共通性と差異」三浦の視点

まず、三浦は自らの問題意識として「書かれたもの」としての日本古代文学の向こう側にあるものとして、具体的な音声による伝承であるアイヌの叙事詩に注目してきたという。

「日本の古代文学には書かれたものしかない。だが、日本古代文学研究においては1947年から1950年までの短期間ではあったが、いわゆる「英雄時代」を巡る議論があった。古事記におけるスサノオ、オオナムチ、ヤマトタケルなど「英雄」と呼ばれる神や人物の背景にはいったい何があったのか。彼らは古代国家の成立期に、様々な苦難を戦い抜いて成長し、やがて王となっていく。国家の成立とこれらの人物の姿が重ねあわされた「英雄時代」が考えられるのではないか、という議論であった。ユーラシアの叙事詩とこれらの古代文学を比較するとどのような可能性があるのか。」

日本古代文学とユーラシア各地の叙事詩との共通性と差異についての三浦の指摘は次のようなものであった。三浦はまず「悲劇性」に着目する。

「ユーラシア規模の叙事詩世界を考えて坂井弘紀が提案した特徴のうち「超自然的な誕生、驚異的な成長、誇張的表現、援

助者の登場」については、日本古代文学も確かに共有している。こうした語り要素における共通性は、叙事詩全体の問題として考えるべきものであろう。

だが、ユーラシア各地の叙事詩において重要となる「戦い」という要素についてはどうだろうか。日本古代文学における「英雄」の戦いはそれとは異なるように思われる。たとえばヤマトタケルは貴種ではあるが、父に愛されない「孤独な英雄」である。この「孤独」という要素はユーラシアの叙事詩群と共通している。また、主人公は妻子を得ても悲劇的な最期を迎える。悲劇的な死によって完結する一代記になっている。主人公はその先の幸せを目指すのではなく、そこで死ぬ。この「死に向かう」という要素は日本的な好みなのだと説明されることがある。だが、これはもしかするとユーラシアの叙事詩に共通する「悲劇的性格」という要素とみることができのかもしれない。たとえばオオナムチを考えてみよう。貴種であり神の子であり、英雄の特徴をすべて備えている。そして彼は悲劇的な死を迎えずに王となる。彼は「死に向かう」わけではない。だが最終的には、より強い神に負けて出雲の社に鎮まつてしまうことになる。これはやはり「幸せな最期」とは言い難い。ここには「死に向かう」というより、むしろもう少し広い意味での悲劇的性格を読み取っていないのではないか。」

一方で三浦はユーラシア叙事詩群との相違点も指摘した。

「萩原はユーラシア叙事詩において「女性が戦う」ことに注目する。ヒロインは主人公を援助して自らも刀をふるうのである。だが、これは日本古代文学には見られないと三浦は指摘する。クシナダ姫はスサノオを援助しないのである。櫛に変えられてスサノオの髪にさされたクシナダ姫が直接戦うことはない。守りとなつていると考えられるにしても、そうと具体的に語られることもないのである。ユーラシア叙事詩群において、女性が戦うのが特徴的だとするならば、この点においては日本古代文学は異なるのではないか。」

「ユーラシアに広がる叙事詩同士のつながり」藤井の視点

モンゴル口承文学研究の藤井真湖は、ユーラシアにおける叙事詩同士のつながりがさらに明らかにされていく可能性を指摘した。

「萩原が「歌う／語る」というパフォーマンス形式の民族や地域を越えた比較を試みていることは重要である。それによって、たとえばエヴェンキの一部がモンゴルから影響を受けている可能性が見えてくる。両者の関係は深く、モンゴル人がエヴェンキの叙事詩を伝承しているケースも見られる。また、極東のサハ民族の伝承に「オランハイ・サハ」という人々が登場する。南シベリアからレナ川流域に移住してきたサハの先祖の人々で

ある。これはモンゴルの西方に在る「アルタイ・ウリヤンハイ」と何らかの関係があるだろう。あるいはまた、坂井によればカザフ民族にはモンゴル系のカルマク民族が敵となる叙事詩があるというが、モンゴルには逆にカザフが敵となる叙事詩があると考えられる（前者は明示的・後者は非明示的に）。こうした逆転した関係性も見えてくる。さらに、それら内容だけでなく、チュルクとモンゴルの叙事詩の文学的表現にも共通性がみられる。チュルク叙事詩では登場人物の驚異的成長について「3日で成長し、4日目に話しはじめ、5日目に帯を締め、6日目に歩き始めた」という常套的表現があるが、モンゴル叙事詩にも「3歳で城を攻め、4歳で別の城を攻め」という表現がある。また誇張としてはチュルク叙事詩の「1月分を1日で成長、1年分を1月で成長、1日で立ち上がり」と、モンゴル叙事詩の「1年の行程を一月で行き、一か月の行程を一日でいき、一日の行程を一時間でいき」というような表現は非常に類似している。そしてこれらの共通性には古層の存在、伝播や文化背景の共通性など、いくつかの可能性が考えられるだろう。文化背景は何らかの手がかりになるはずである。例えばモンゴル西部では「叙事詩は他集団（この集団はモンゴル系下位集団を指すことが多いが他民族を排除するものではない）から学んではいけない」とされている。こういった慣行などについてユーラシア規模での比較を行うことも無駄ではないだろう。」

また、藤井は坂井による「チュルク叙事詩における戦いは歴史性を反映している」という説明を受けて、モンゴル叙事詩の歴史性と「戦いの目的」についてのモンゴル地域の叙事詩の東西差を指摘した。

「モンゴル英雄叙事詩においては、異民族との戦い（という形での歴史性）が明示されることはないが、チンギス・カンの系譜上の王が主人公に仮託されていると考えられる東のハルハ英雄叙事詩（シンポジウムでは「チンギス・カンの一族の物語」と表現）では、主人公の妻が敵に奪われるという話になっているのに対し、チンギス・カン一族と姻族関係になった集団のリーダーを主人公に対応させていると考えられる西のオイラト英雄叙事詩（シンポジウムでは「チンギス・カンの姻族の一族の物語」と表現）では、主人公が妻を娶りに行くという展開が多い。東西の内容的な差には関わらず、モンゴル英雄叙事詩は現在こそ娯楽的なものになっているが、過去においては娯楽的なものではなかった。このことはモンゴル英雄叙事詩がチンギス・カンという存在の影響下に展開してきたということを暗示しており重要である。」

「孤独な戦い」丹菊の視点

丹菊はニヅフの叙事詩がアイヌ叙事詩とユーラシアの叙事詩

群との中間点に位置することを指摘した。

「サハリン島とアムール河口地域にまたがるニヴフ民族だが、叙事詩はサハリン島で伝承されている。サハリン島は地理的にモンゴル、チュルク、トゥングースの叙事詩とアイヌの叙事詩をつなぐ中間地点に位置する。このサハリン島のニヴフの叙事詩は形式的にも内容的にもアイヌの叙事詩と類似しているが、アムール地方では伝承されていない。つまり叙事詩という点ではサハリンのニヴフとアイヌに共通性があり、アムール地方のニヴフとは断絶している。この分布の偏りはこの地域における叙事詩の起源あるいは伝播経路と関連しているのかもしれない。

サハリンのニヴフの叙事詩とアイヌの叙事詩には形式上の共通性が大きい。内容的にも主人公がともに無名でしばしば孤児であること、味方にはほとんど軍勢が登場しないこと（孤独な主人公）、登場する地名の具体的な位置がよくわからないこと、などの共通性がある。アイヌの叙事詩は「不思議な護符」「ヒロインをのぞく」主人公の援助者」などがほとんど登場しない点でユーラシア叙事詩と異なるが、その点ではニヴフ叙事詩も同様である。そして散文物語においてはそれらの要素を含んでいる点でも両者は同様である。だが、一方ではニヴフとアイヌの叙事詩には差異もみられる。例えば結末の差は大きい。アイヌ叙事詩の結末は基本的に次の戦いへの休止であり、結末らしい結末になっていないが、ニヴフ叙事詩にはもう少し明確な結

末があることが多い。」

コメンテーター3名のコメントは、パネラー3名による報告でなされた問題提起を受けるかたちで、日本列島・モンゴル地域・サハリン地域と他地域との形式および内容にみられる共通性と差異を指摘するものである。これでユーラシア西部から中央アジア、ユーラシア東部および日本列島まで、つまりユーラシア全域に広がる叙事詩の連続性が改めて見えてきたように思われる。

おわりに

本シンポジウムでは丹菊が司会進行を担当させていただいた。パネラー、コメンテーターとも錚々たる顔ぶれがそろっていないが、広がりと深まりが足りなかったとすれば、思い切りの悪い丹菊の責任である。会場からは「今回の議論は起源や分類に偏りすぎているか、例えば語り手の問題なども重要ではないか」という重要な指摘もあった。叙事詩を巡っては、まだ多くの問題が残されている。叙事詩研究は日本では必ずしも盛んではない。専門家も全国に散っている。本シンポジウムが今後の叙事詩研究を少しでも後押しする一助となれば幸いである。

（たんぎく・いつじ／北海道大学アイヌ・先住民研究センター）